

映画が好き

仙台シネマ倶楽部ニュース

1988

11

19

発行：仙台シネマ倶楽部
 仙台市五橋1-5-13
 平和友好会館3階
 022-222-9695

場所：戦災復興記念館 4F 研修室

11 月 19 日 (土)

上映時間

- ① 2:00
- ② 4:30
- ③ 7:00

↓ 今後の予定

帰らざる河

12/3



(' 54 アメリカ 91分
 オットー・プレミンジャー監督)

満月の夜

12/18



(' 84 フランス 102分
 エリック・ロメール監督)

1月例会

『アタラント号』
 (ジャン・ヴィゴ 監督)

2月例会

『幕末太陽伝』
 (川島雄三 監督)

3月例会

『ライオンの娘』
 (デビッド・リーン 監督)



十一月例会

『哀しきベレドナ』

(スタッフ)
原作 ジュール・ミシュレ
脚本 福田善之、山本映一
監督 山本映一
アニメート 杉井ギサブロー
音楽 佐藤允彦

(声の出演)

ジャンヌ 長山善子
ジャン 伊藤孝夫
領主 仲代達矢
ナレーター 中山千夏

『解説』凄じい魔女狩りのドラマ。アニメーション史上傑作と輝く映像美の極致！エロチシズムと暴力、凄惨——官能と陶酔の世界！……というがこの映画の宣伝コピーだ。官能と陶酔、というといかにもありきたりの表現だが、この映画に聞けばまさに偽りなしと言える。例えば主人公ジャンヌが領主に凌辱されるシーン。「ジャンヌ、両脚から体がふたつに引き裂ける(スローモーション)。湧き上るおびただしい血……いや、真紅のこうもり。乱舞するこうもり。(中略)嵐のようにうねるジャンヌの髪。流れる涙の川……」となる。不幸にも魔女のレッテルをはられて迫害され、凌辱されるジャンヌ。しかし、絶望の淵から貧しい

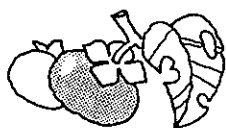
人間の女神として復活していく、という一大ロマン、幻想のファンタジーだ。

フランスの歴史家、ジュール・ミシュレの著作『魔女』から、福田善之が脚本を書き、鬼才、山本映一が監督。アニメートを担当したのが、のちにTVアニメをはじめ劇場アニメ映画『銀河鉄道の夜』『源治物語』などの意欲作を監督した杉井ギサブロー。さらに音楽にはジャズピアニスト、佐藤允彦があたる。

アニメの魔力にたつぷり浸れる傑作です！

(一九七三年、由プロダクション・日本ヘラルド映画製作、89分)

『ストーリー』中世フランスの寒村。熱烈な恋が実って結婚したジャンヌとジャンヌは買物物の献上に行き、ジャンヌはそこで領主と家来達に犯される。絶望の果てに立ち直ったジャンヌは、糸紡ぎで村の飢饉を救う。しかし、今度は彼女が『魔女』だという悪い噂が立ち始める。



こんな意見が返って来たよ

先月、例会に参加した会員の皆さんに、仙台シネマ倶楽部の未来を問うてみました。

質問は、①改善したほうがいいこと、②その改善のためなら我慢してもいいこと、③そのためであってもやって欲しくないこと、の3点。

回答で割と多かったのは、作品についてでした。マイナー過ぎて人が求めているのではないかと、意見と、今の作品の質は落とさないでほしい、という意見。選定の方法を、改善すべきという意見。宣伝が足りないという声や、会員同志のコミュニケーションが無いという声も。

「今のままがいいと思います」という方もいて、嬉しかったんだ、という。それではちょっと先の、あまり発展しないように思えるので、こめんなさい。

「登録料としての、期間を決めた会費」と「例会に参加する人がその都度払う会費」との併用とか、三ヶ月会期にして、ロードショウ料金で入会できるようにするとか、普段から考えて下さるからこそ出てくる意見が、いくつもあったことです。



例会の回数や会員の制度、作品のとり合わせ、特別例会の回数など工夫を凝らして、何とか映画ファンの期待にも応え、運営も成り立つようにしていきたいと思ひます。

引き続き、同じ内容で全員の方にアンケートをお願いいたします。前回なさった方もよろしければ、どうぞ。アンケート用紙に附いて、例会にお持ちになっても、郵送でも、葉書、電話でも結構です。出来れば名前も教えてください。①改善したほうがいいこと、②その改善のためなら我慢してもいいこと、③そのためであってもやって欲しくないこと。3つ揃わなくても構いませんので、お願いします。

先月の例会でのアンケートを紹介いたします。

- ☆ 会員同志の交流をもつと図れるようにしたい。
- ☆ 映画の選定の方法を考えてほしい。
- ☆ 会場の画面が小さく迫力が無い。(今回はシネスコで良かったが)エルパーク程度の会場はどうか。
- ☆ 会員の例会方式はやめて月一回又は二ヶ月一回の上映会にしたらどうか。(会費は値上げしてもよい)会員制と一回短の入場券の併用。
- ☆ 番組の選定がマニア向き過ぎるのだから、集まりが悪い。西部劇やミステリーものなどの名作もどうか。会員に作品リストを配布してジャンル別に希望をとったどうか。(定期的に)。
- ☆ 私自身は満足していますが、もう少し一般受けする(メジャー)な作品を増やしてはどうでしょうか。
- ☆ 会員制と入場料制を併用することは出来ないのでしょうか。
- ☆ たまには出来ない人のために、会費なしで一回五百円ぐらいで会費について。
- ☆ 六ヶ月二千円という、初めて来る人は面倒臭さを感じるらしい。はじめ普通のロードショウと同じ値段で誘って、入会してから継続したくなるようにするとか。
- ☆ 新入会員のみの入会金(五百円) + 三ヶ月会費(千円) = 千五百円。次回継続からは現行どりにする。
- ☆ 上映作品の質だけは維持して欲しいなあと思う。
- ☆ これ以上会場の質を落して欲しくない。
- ☆ 料金の値上げはやむを得ない。今までどおりでよいと思います。これからはよろしく願ひします。



友だちの恋人

◆ロメールが好きっ③◆ エリック・ロメールの映像と音

佐々木久善

『友達達の恋人』の中で、印象に残っている場面がある。それはプールでブランシユとレアに出会ったアレクサンデルが、彼女たちの後ろ姿を見送った後に、プール脇にいたアドリエンヌの手を取り立たせると思わせて、プールに落ちてしまおうという場面だ。何でそんなところが記憶に残っているのかと考えると、カメラの何とも好奇に満ちたねちっこさがいっているわけでも、クレーンで空を横切っているわけでもなく、ただひたすら見詰めているだけなのだけだ。でも、何かが起こるのだとい

う、そんな予感を抱かせるカメラのまなざしが印象的なのだ。

同様に印象的なのが、現実音のみによるサウンドトラックの構成だ。この映画には劇伴の音楽は一切所も使われていない。しかし、だからといって、彼はサウンドトラックを軽く考えている訳ではない。そこでは、現実音が音楽に匹敵する役割を演じている。新興都市の喧騒が、音楽に置き換えられない表現として使われている。ロメールにとって、サウンドトラックは彼の聴覚の再構成なのだ。

ここで注意しなければならないのは、現実音の使用が、彼の映画が同時録音の原則の下で撮影されているということとはおよそ無関係であるということだ。つまり、台詞の録音に紛れ込んだ音をそのまま使ってしまったように思われるが、それは、ゴダールが音を切り刻んでの違和感を好んだように、ロメールは、自然さを選択しているというだけの事なのだ。

彼の映画は自然だ。それは生理に裏打ちされた自然さだ。しかし追求された自然さであるが故に、他の人と違った彼自身の生理を露呈させてしまっている。あまりに自然過ぎて、作為というものが感じられる。彼が見つめるものは、この世には存在しない。いや、存在しないのだ。エリック・ロメ

ールという作家によって映画館の暗闇に再構成された虚構が、現実のように思われるとき、我々は、エリック・ロメールという人が確かに存在していたことを知るのである。

彼が作品の冒頭に掲げる語は、そんなわざとらしいまでの自己主張に対する彼自身の照れなのではないだろうか。

ただ映画の名誉のために

フリント・イーストウッド

ルナティック高沢

カーメル市長の任期も切れ、ようやくイーストウッドが映画に帰ってきた。アメリカでの人気と知名度からすると、将来的にレーガンに次いで俳優出身のアメリカ大統領が誕生してもおかしくはないだろう。しかし、私は彼に絶対政治家になどなって欲しくない。だいいち世界平和のためにもよくないだろうし、そして何より映画界にとっても痛い損失となるだろう。そんな訳で、私達映画ファンは、イーストウッドの政界出馬を挫折させるために努力すべきだ。そのためには一刻も早く日本で『バード』を公開してヒットさせてやり



ましょう。

それにしても数年前の『センチメンタル・アドベンチャー』とい、一昨年の『ペイルライダー』、昨年の『ハートブレイク・リッジ』そして今回の『ダーティ・ハリー5』とい、客の入りは寂しいものがある。大抵の人は『イーストウッドの映画はワンバターン』とか『タカ派の言動が嫌い』などとのたまう。

しかし私にいわせれば、そういう人間はイーストウッドの映画に限らず、映画を「見る」ことの厳しさに欠けているだけだと思ふ。いったい彼の映画のどこがワンバターンなのか？よく目を凝らしてみるのがいい！

監督第一作の『恐怖のメロディ』は軽はずみな情事をしたばかりに女につけ狙われる情けない役だし、『タイトロープ』では異常性欲の殺人犯を追う立場にありながら逆に自分の中の異常性欲を見出し悩む刑事の役である。あるいは『ブロンコ・ピリー』や『ダーティ・ファイター』では派手なアクションのほとんどない、より人間味溢れるドラマを演じている。あるいは最近では、例えば『センチメンタル・アドベンチャー』では酒に溺れたカントリー歌手を演じ、その死後に甥の少年（実の息子）が演じている（運命を引き継いでみせたり、『ハートブレイク・リッジ』では設立したずの落ちこぼれ小隊を鍛え直す軍曹になったりするなど、次の世代への継承が重要なテーマとなっている。どうだろう。これだけ様々な役割をこなしているのに、はたしてワンバターンなどといえるのか。マカロニウエスタンや『ダーティ・ハリー』シリーズのイメージは確かに強烈だが、あまりにもそれに促われ過ぎると、イーストウッドの実体を見失うことになるのだ。あるいは『イーストウッド』タカ派』という意見であるが、現実ではそうかもしれないが、それが映画にもあてはまるかという決してそんなことはないのである。ソ連に潜入してその最新鋭戦闘機

